

ネヘミヤ記1-3章「神に導かれる指導者」

1A 涙の祈り 1

1B 残りの民のそしり 1-3

2B 神への嘆願 4-11

2A 恵みの御手 2

1B 王の送り出し 1-10

2B 代表者への呼びかけ 11-20

3A 仕事の着手 3

本文

ネヘミヤ記の学びです。午前中もお話ししましたように、ネヘミヤは強い指導力を持って、エルサレムの町の再建を果たしました。それが神から始まり、神によって成ったことを証しているのがこの書物です。エズラ記は「神の民の建て直し」が主題でしたが、ネヘミヤ記は「神の民の守り」であります。神の民が建て直される時に、必ず敵による反対があります。その攻撃に対抗しながら、さらにしっかりと信仰の土台を固めて、知恵を尽くして不動のものとしていく姿を見ていくことができます。

私たちの救いで言うならば、良い業を私たちの内で始めてくださるのは神ですが、神は私たちに志を立ててください、事を行わせてくださるのです。ピリピ書 2:13 に、「神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行なわせてくださるのです。」とあります。キリスト者として神に仕えていきたいと願っている人には、ネヘミヤ記は最適です。どのようにしたら、主から与えられた重荷が具体的に目に見える形になっていくのかを、ネヘミヤを通して見ていくことができます。そして、育てられた信仰を堅くしていくことについては、コロサイ書にこうあります。「あなたがたは、このように主キリスト・イエスを受け入れたのですから、彼にあって歩みなさい。キリストの中に根ざし、また建てられ、また、教えられたとおりに信仰を堅くし、あふれるばかり感謝しなさい。(2:6-7)」自分に与えられた信仰が、どうしても揺らいでしまう。そう悩んでおられる方にも最適です。

ネヘミヤ記は大きく、二つの部分に分かれます。一つは城壁の再建工事です。1章から6章までがそれです。そして改めて7章から13章までは、ネヘミヤが改めて学者エズラと共にユダヤ人を、エルサレムの神殿礼拝を中心にする生活を確立すべき働きかけています。

1A 涙の祈り 1

1B 残りの民のそしり 1-3

1:1 ハカルヤの子ネヘミヤのことば。第二十年のキスレウの月に、私がシュシャンの城にいたとき、

1:2 私の親類のひとりハナニが、ユダから来た数人の者といっしょにやって来た。そこで私は、捕

囚から残ったのがれたユダヤ人とエルサレムのことについて、彼らに尋ねた。1:3 すると、彼らは私に答えた。「あの州の捕囚からのがれて生き残った残りの者たちは、非常な困難の中にあり、またそしりを受けています。そのうえ、エルサレムの城壁はくずされ、その門は火で焼き払われたままです。」

「第二十年」というのは、アルタシャスタ王の治世第二十年ということです。紀元前 446 年から 445 年にかけての年です、「キスレウ」の月は今の 11 月から 12 月にかけてなので、446 年 12 月頃ではないかと思われまます。エズラがエルサレムに帰還後、約 13 年後のことです。そして「シュシヤン」は、「スサ」とも呼ばれ、古代ペルシヤであるエラムの時から首都であり、ペルシヤ帝国の時も冬の王の宮殿として使われていました。今のイランの南西部分にあります。そして、エステル記における王妃エステルの活躍は、シュシヤンにおけるものです。

そして、ハナニにネヘミヤが尋ねたところ、ユダヤ人の残りの民とエルサレムは、大きな困難の中にあり、諺られているとあります。これからネヘミヤ記においても、敵による誹り、また内部からも敵の策略でネヘミヤに対して攻撃をしてきます。そして、城壁は崩されている、門が火で焼き払われている、とありますが、覚えておられるでしょうか、エズラ記 4 章にて城壁の再建をしようとしたら、周囲の住民が反対して、地方政府をも買収して、王に書状を送りました。城壁を修復する工事を、彼らの王に対する反逆であると中傷したのです(12 節)。それで今、このような状態になっています。

2B 神への嘆願 4-11

1:4 私はこのことばを聞いたとき、すわって泣き、数日の間、喪に服し、断食して天の神の前に祈って、1:5 言った。「ああ、天の神、主。大いなる、恐るべき神。主を愛し、主の命令を守る者に対しては、契約を守り、いつくしみを賜わる方。1:6 どうぞ、あなたの耳を傾け、あなたの目を開いて、このしもべの祈りを聞いてください。私は今、あなたのしもべイスラエル人のために、昼も夜も御前に祈り、私たちがあなたに対して犯した、イスラエル人の罪を告白しています。まことに、私も私の父の家も罪を犯しました。1:7 私たちは、あなたに対して非常に悪いことをして、あなたのしもべモーセにお命じになった命令も、おきても、定めも守りませんでした。

ネヘミヤの必死の祈りです。バビロン捕囚になってしまった、そのイスラエルの罪を絶えず告白していました。

1:8 しかしどうか、あなたのしもべモーセにお命じになったことばを、思い起こしてください。『あなたがたが不信の罪を犯すなら、わたしはあなたがたを諸国民の間に散らす。1:9 あなたがたがわたしに立ち返り、わたしの命令を守り行なうなら、たとい、あなたがたのうちの散らされた者が天の果てにいても、わたしはそこから彼らを集め、わたしの名を住ませるためにわたしが選んだ場所に、彼らを連れて来る。』と。

申命記 30 章 1-5 節にある、神の約束です。離散の民となったユダヤ人が帰還するという約束は、バビロンからの帰還のみならず、紀元 70 年にユダヤ人が世界に離散してから帰還しているユダヤ人にも見ることができます。そしてイエス様は、弟子たちに対してご自分の再臨の時に、この帰還を完成してくださることを約束されました。「人の子は大きなラツパの響きとともに、御使いたちを遣わします。すると御使いたちは、天の果てから果てまで、四方からその選びの民を集めます。(マタイ 24:31)」ネヘミヤは今、9 節の最後のところに注目しています。エルサレムに彼ら連れ帰るとい約束です。物理的に連れ帰ってくださったけれども、その民が虐げられているのは、約束にかなったことではありません。

1:10 これらの者たちは、あなたの偉大な力とその力強い御手をもって、あなたが贖われたあなたのしもべ、あなたの民です。

午前にもお話したように、これは出エジプトにおける神の働きです。私たちも、同じように祈ることができます。私たちは、キリストと共に死に、そしてキリストと共によみがえらせられた、新しく造られた者です。神がイエスを復活させるという全能の力を、信じる者に働かせてくださいます。

1:11 ああ、主よ。どうぞ、このしもべの祈りと、あなたの名を喜んで敬うあなたのしもべたちの祈りとに、耳を傾けてください。どうぞ、きょう、このしもべに幸いを見せ、この人の前に、あわれみを受けさせてくださいますように。」そのとき、私は王の献酌官であった。

繰り返し、「祈りに、耳を傾けてください」と嘆願しています。私たちの願いは、この切なる嘆願から始まります。彼は、座りました。そして泣きました。そして、祈りました。自分が何とかしようと、せかせか動きませんでした。祈って、祈って、主に自分を任せる祈りを積み上げました。イエス様が言われました。「まして神は、夜昼神を呼び求めている選民のためにさばきをつけないで、いつまでもそのことを放っておかれることがあるでしょうか。(ルカ 18:7)」

2A 恵みの御手 2

そして、この祈りがかなえられる時が来ます。

1B 王の送り出し 1-10

2:1 アルタシャスタ王の第二十年のニサンの月に、王の前に酒が出たとき、私は酒を取り上げ、それを王に差し上げた。これまで、私は王の前でしおれたことはなかった。

時は同年のニサンの月、3 月か 4 月です。したがって、ネヘミヤがエルサレムの状況を聞いてから四か月経っています。彼は忍耐をもって祈っていました。この忍耐こそが、主が彼のうちにさらにご自身の思いを植えておられます。「その忍耐を完全に働かせなさい。そうすれば、あなたがたは、何一つ欠けたところのない、成長を遂げた、完全な者となります。(ヤコブ 1:4)」私たちが忍

耐して祈ると、その中に神ご自身の性質が培われていきます。

2:2 そのとき、王は私に言った。「あなたは病気でもなさそうなのに、なぜ、そのように悲しい顔つきをしているのか。きっと心に悲しみがあるに違いない。」私はひどく恐れて、2:3 王に言った。「王よ。いつまでも生きられますように。私の先祖の墓のある町が廃墟となり、その門が火で焼き尽くされているというのに、どうして悲しい顔をしないでおられましょうか。」

王に心の悲しみを見られてしまいました。これは、実はとても危険なことです。王に対して、幸せをもたらさないものは一切、排除されています(例:エステル 4:2)。ネヘミヤは、どんなに心が悲しくても、王の前では決してその悲しみを見せませんでした。ところが見られてしまいました。通常は、ここで罷免させられるか、最悪の場合、死刑に処せられるかもしれません。しかし、主は王にネヘミヤに対する好意を与え、むしろ、この失態を用いて、祈りを聞いてくださいます。

ネヘミヤは恐れました。けれども、言葉を選んで王に答えました。アルタシャスタ王は、城壁の再建工事をやめさせた書状を書いた張本人です。ですからネヘミヤは、エルサレムやユダヤ人の固有名詞を使わず、誰にでもある願い、つまり自分の先祖の墓のある町、故郷が廃墟となっていることをまず話しました。私たちは、この世に対していつもそのまま話せばよい、というものではありません。騙してはいけなし、恐れて隠してもいけません、不必要なことを言わなくても良いのです。

2:4 すると、王は私に言った。「では、あなたは何を願うのか。」そこで私は、天の神に祈ってから、2:5 王に答えた。「王さま。もしもよろしくて、このしもべをいれてくださいますなら、私をユダの地、私の先祖の墓のある町へ送って、それを再建させてください。」

王はなぜ悲しい顔つきをしているのか、と尋ね、ネヘミヤの答えに怒ることをせず、「では、あなたは何を願うのか。」と尋ねました。ここに主が起こして下さっている流れを見たのでしょうか。そこで彼は大胆に発言します。ユダの名を出し、それが先祖の墓のある町であると発言しました。

しかしこの発言の前に、彼は祈っています。瞬間祈祷です。彼が、このような祈りを何度も捧げているところを、私たちは読みます。おそらく、王でさえも気づくことのない祈りだったでしょう。ここがネヘミヤの優れているところです。彼は深い祈りを、そして長い祈りを捧げてきましたが、決してその祈りの姿勢を崩すことはありませんでした。実務中も、どんな時にも忘れませんでした。絶えず主に拠り頼んでいたのです。パウロは私たちに言いました。「絶えず祈りなさい。(1テサロニケ 5:17)」どんな小さなことでも、「主よ、どうかあなたが私に知恵と言葉を授けてください。」と祈るのです。

2:6 王は私に言った。..王妃もそばにすわっていた。..「旅はどのくらいかかるのか。いつ戻って

来るのか。」私が王にその期間を申し出ると、王は快く私を送り出してくれた。

祈りが聞かれました。そして王のほうから、旅の期間を尋ねてきています。ここに王妃が傍に座っているということは、これは公の場ではなく、かなり私的空間が与えられている場であったと考えられます。そしてネヘミヤは、その期間をすぐに申し出ることができました。彼は四か月の祈りの中で、信仰をもって、エルサレムの再建のために何をしなければいけないのかを考えていました。もしこの祈りがなければ、もちろんすぐに答えられなかったでしょう。

2:7 それで、私は王に言った。「もしも、王さまがよろしければ、川向こうの総督たちへの手紙を私に賜わり、私がユダに着くまで、彼らが私を通らせるようにしてください。2:8 また、王に属する御園の番人アサフへの手紙も賜わり、宮の城門の梁を置くため、また、あの町の城壁と、私がいいる家のために、彼が材木を私に与えるようにしてください。」私の神の恵みの御手が私の上にあったので、王はそれをかなえてくれた。

ネヘミヤは、この動きは大きな反対を受けることは良く分かっていました。そして資材も決定的に不足している事を知っていました。そこで、さらに大胆に王にユダに着くまでの通過許可の手紙をお願いし、さらに材木の調達をお願いしました。私はここで、次の言葉を思い出します。「そういうわけですから、賢くない人のようにはなく、賢い人のように歩んでいるかどうか、よくよく注意し、機会を十分に生かして用いなさい。悪い時代だからです。(エペソ 5:15-16)」悪い時代ですから、賢く動きます。そして機会を十分に生かして用います。

そしてエズラと同じように、「神の恵みの御手が私の上にあったので、王はそれをかなえてくれた。」と言っています。主に栄光をお返ししています。事実、神の恵みの御手があったのですが、人間の誘惑として、「私が賢く動いたから、このようにできたのだ。」とうぬぼれてしまいます。しかし、すぐに神がなされたことをほめたたえました。

そしてここで、神の大きなご計画についてお話ししなければいけません。神は、ユダヤ人とエルサレムを回復してくださる意図を持っておられます。今、神殿を建て直し、城壁を建て直し、そして律法によって神の民を立て直そうとしておられます。けれども、王は回復されていません。しかし、神は彼らの王、メシヤを、このアルタシャスタ王の書状をもって開始する、七十週を定めてくださいました。

ダニエル書 9 章を開いてください。紀元前 539 年に、ダニエルはネヘミヤと同じように、神の民とエルサレムを回復してくださるよう、神の憐れみを求める祈りを捧げました。すると神からその答えが与えられました。それが 9 章 24 節からの言葉です。

9:24 あなたの民とあなたの聖なる都については、七十週が定められている。それは、そむき

をやめさせ、罪を終わらせ、咎を贖い、永遠の義をもたらし、幻と預言とを確証し、至聖所に油をそそぐためである。9:25 それゆえ、知れ。悟れ。引き揚げてエルサレムを再建せよ、との命令が出てから、油そそがれた者、君主の来るまでが七週。また六十二週の間、その苦しみの時代に再び広場とほりが建て直される。9:26 その六十二週の後、油そそがれた者は断たれ、彼には何も残らない。やがて来たるべき君主の民が町と聖所を破壊する。その終わりには洪水が起こり、その終わりまで戦いが続いて、荒廃が定められている。9:27 彼は一週の間、多くの者と堅い契約を結び、半週の間、いけにえとささげ物とをやめさせる。荒らす忌むべき者が翼に現われる。ついに、定められた絶滅が、荒らす者の上にふりかかる。

神は、油注がれた者、すなわちメシヤ、キリストを七十週のうちにもたらずことを約束してくださいました。これは、ダニエル書の他の箇所、また黙示録を読みますと、「週」は七年間のことを表していることが分かります。つまり、490年間です。それが25節、「引き揚げてエルサレムを再建せよ、との命令が出てから」ということであります。それがここ、アルタシャスタ王がネヘミヤに与えた許可であります。ある学者が計算して、それが紀元前 445 年 3 月 14 日であると言っています。

そして新改訳による翻訳だと出てこない意味があります。25 節と 26 節のところを新共同訳で読みます。「25・・・エルサレム復興と再建についての／御言葉が出されてから／油注がれた君の到来まで／七週あり、また、六十二週あって／危機のうちに広場と堀は再建される。26 その六十二週のと油注がれた者は／不当に断たれ・・・」七十週を、三つに区分しています。初めの七週、そして六十二週、その後でメシヤが断たれます。その後、残された一週があります。

七週の間、「危機のうちに広場と堀が再建される」と読めます。つまり 49 年間の内にエルサレムの町が再建されるということです。ネヘミヤによって城壁は 52 日間の内に建てられ、その後、エルサレムの城壁の中も再建されていきました。そして、次は六十二週あります。その後、メシヤが不当に断たれます。アルタシャスタ王が再建の命令を出した、445 年 3 月 14 日から、七週と六十二週の後、先ほど言及した学者の計算によると、紀元後 32 年 4 月 6 日だそうです。・・・いかがですか？この時は、まさしくイエス様が公生涯を行われておられた時です。そしてその学者は福音書によって、32 年 4 月 6 日というのが、イエス様が棕櫚の聖日にエルサレムに凱旋された、まさしくその日であるとしました。ゆえに、イエス様はその日にメシヤであることの歓喜を受けられて、公にメシヤとしてエルサレムに入城されたのです。

けれども、メシヤは不当に断たれます。イエス様は、王として迎えなければいけなかったユダヤ人指導者よって、またローマによって殺されました。それから、「やがて来るべき君主の民」とありますが、ダニエル書には 7 章にそれが復興ローマからであることが分かっています。つまり、ローマの民が紀元 70 年にやって来て、そしてエルサレムの町と神殿を破壊しました。それから「終わりまで戦いが続く」と言っていますが、七週と六十二週の後、実は長い期間を描いています。エルサレムは紀元前 70 年から、ずっと異邦人の国による戦いに巻き込まれ、ずっと荒廃が続い

ていました。1948年のイスラエルが建国、1967年に六日戦争でイスラエルは、エルサレムを奪還しました。けれども、まだ神殿の丘には、イスラム教の寺院「岩のドーム」が立っています。

しかし、そこに神殿を建てるべく働きかける人物がいます。それが27節の「彼」すなわち、来るべき君主、反キリストです。彼はユダヤ人の多くの者と契約を結びます。これが最後の第七十週目、七年間の始まりです。その半週の後半、すなわち後半の三年半に反キリストは、いけにえと捧げ物をやめさせます。彼が自分の正体を現すのです。ユダヤ人に神殿を建ててあげるようにさせながら、最後の半週の時にはそれをやめさせ、荒らす忌むべきことを行なうということです。しかし、彼は全滅が定められています。七年間の最後にまことのキリストが再臨されて、反キリストを滅ぼされるからです。そして、エルサレムは回復し、王キリストがそこからイスラエルを、そして世界を君臨されます。

したがって戻りますと、ネヘミヤが四か月かけて嘆願し、そして王が帰還を許可したそのことは、神がご自分のキリストをこの世にもたらず時間表の始まりとしてお定めになっていたのです。

2:9 私は、川向こうの総督たちのところに行き、王の手紙を彼らに手渡した。それに、王は将校たちと騎兵を私につけてくれた。2:10 ホロン人サヌバラテと、アモン人で役人のトビヤは、これを聞いて、非常に不きげんになった。イスラエル人の利益を求める人がやって来たからである。

ネヘミヤは、これからこの男たちから、非常に厳しい、執拗な嫌がらせを受けていきます。ホロン人サヌバラテは、聖書ではないですが、他の文献には「サマリヤの総督」という名が付いています。ですから再び、サマリヤ人による強い反対を受けることになりました。そして、ヨルダン川の向こう側にあるアモンの役人トビヤです。サヌバラテは極めて狡猾で、ユダヤ人の内部、いや深部にまでその影響を浸透させ、ネヘミヤを悩ませます。

2B 代表者への呼びかけ 11-20

ネヘミヤは、この敵の存在をすぐに察知しました。イエス様がご自分の遣わす弟子たちに命じられました。「いいですか。わたしが、あなたがたを遣わすのは、狼の中に羊を送り出すようなものです。ですから、蛇のようにさとく、鳩のようにすなおでありなさい。(マタイ 10:16)」私たちキリスト者は、人に対して恵みをもって、優しく接します。しかし、悪い時代ですから蛇のような聡さをもって接します。ある意味での強かさが必要です。隣人を愛していくのですが、過度に信頼することはしません。

2:11 こうして、私はエルサレムにやって来て、そこに三日間とどまった。2:12 あるとき、私は夜中に起きた。ほかに数人の者もいっしょにいた。しかし、私の神が、私の心を動かしてエルサレムのためにさせようとされることを、私はだれにも告げなかった。また、私が乗った獣のほかには、一頭の獣も連れて行かなかった。

彼がこれから行う城壁再建の工事が、計画段階で人に知られたら敵によって握りつぶされてしまいます。したがって、用心さは、自分の連れの数人も連れて行かなかったほどです。何と、自分の乗った獣のほかに、他の獣にも知らせないという用意周到さであります。

2:13 私は夜、谷の門を通して竜の泉のほう、糞の門のところに出て行き、エルサレムの城壁を調べると、それはくずされ、その門は火で焼け尽きていた。2:14 さらに、私は泉の門と王の池のほうへ進んで行ったが、私の乗っている獣の通れる所がなかった。2:15 そこで、私は夜のうちに流れを上って行き、城壁を調べた。そしてまた引き返し、谷の門を通して戻って来た。



これから、聖書地図などに掲載されている、ネヘミヤの時代のエルサレムをご覧になるとよいでしょう。西側にある谷の門から始まり、南に行きシロアムの池のおうに行きました。それから東側に回りましたが、瓦礫に塞がれていたのでケデロンの谷に降りて歩いたのでしょう。そして元来た町に戻って谷の門を通りました。

このことをすべて行ってから、初めて代表者に話していきます。ネヘミヤは、主に与えられているビジョン、幻をこのようにして、ただ独りで自分の目で確かめ、温めて、そして行動を起こし、そして初めて人々に話し

ていきます。このことを聖書では、「慎み深さ」と呼びます。「私は、自分に与えられた恵みによって、あなたがたひとりひとりに言います。だれでも、思うべき限度を越えて思い上がってはいけません。いや、むしろ、神がおののけに分け与えてくださった信仰の量りに応じて、慎み深い考え方をしなさい。(ローマ 12:3)」

イエス様が、慎み深い方でありました。主は、ガリラヤで奇跡を行われていた時に、らい病を癒された時に、「だれにも話してはいけません。ただ祭司のところに行って、見せなさい。」と言われました。悪霊どもが、「あなたは神の聖者です」と叫ぶと、黙らせて、出ていけと命じられました。そして人々は、イエスは誰なのかという議論を行いました。そしてついに、イエス様ははっきりと弟子たち

にだけお語りになりました。「あなたは、誰だと思うか？」と。そして、ペテロが「あなたは、生ける神の御子キリストです。」と答えました。そしてこのことを誰にも言うてはならない、と戒められたのです。そして、定められた時にご自身が公にキリストであることを現し、そして神が定められたように不当に断たれる、すなわち十字架につけられるようにされたのです。

主の働きを私たちは、そのまま心に与えられたことを言いまわる必要はありません。そのまま言いまわると、主から与えられたものが、そのまま主から与えられたものとして伝わるとは限らないからです。むしろ、主から与えられた志を、最大限の効果をもって遂行できるように、ネヘミヤのように祈り、熟考し、行動して、それから発言するのです。主の証しは、言葉だけでなく行ないの中で現れるのです。行いによって現れたところに裏打ちされた言葉にこそ、主から与えられた権威と力があります。

2:16 代表者たちは、私がどこへ行っていたか、また私が何をしていたか知らなかった。それに、私は、それをユダヤ人にも、祭司たちにも、おもだった人たちにも、代表者たちにも、その他工事を
する者たちにも、まだ知らせていなかった。2:17 それから、私は彼らに言った。「あなたがたは、
私たちの当面している困難を見ている。エルサレムは廃墟となり、その門は火で焼き払われたま
まである。さあ、エルサレムの城壁を建て直し、もうこれ以上そしりを受けないようにしよう。」2:18
そして、私に恵みを下さった私の神の御手のことと、また、王が私に話したことばを、彼らに告げた。
そこで彼らは、「さあ、再建に取りかかろう。」と言って、この良い仕事に着手した。

独りで調査したことによって、初めて彼は城壁再建を指揮できます。3章にて、彼がここでの調査に基づき、絶妙な連携で工事の作業を行うことができるよう指示することができました。ですから独りで調査して、それから祭司たち、その他の主だった人々に自分の計画を明かしました。

そしてネヘミヤは「私たちは」と語り始め、自分自身をエルサレムの共同体の中に入れていきます。これから、チームとしての働きをネヘミヤは始めます。自分もその働き手の一部として語り始めました。午前礼拝でも話しましたが、私たちは、自分の教会を傍観することはできません。あたかも自分が教会外の人間であるかのように語ることは、自分が体の中で足なのに、自分は手ではないから体に属さないと言っているのと同じです。

ユダヤ人のかしらたちは、落胆していました。困難を見えていました。けれども、ネヘミヤは動機付けます。その目標は、「そしりを受けないようにする」ということです。そしりは、人の心を打ち砕きます。イスカリオテのユダの裏切りが預言されている詩篇 69 篇には、「そしり」という言葉が誤解使われています。イエス様が十字架の上で受けた悩みを、こう打ち明けておられます。「あなたは私へのそしりと、私の恥と私への侮辱とをご存じです。私に敵対する者はみな、あなたの御前にいます。そしりが私の心を打ち砕き、私は、ひどく病んでいます。私は同情者を待ち望みましたが、ひとりもいません。慰める者を待ち望みましたが、見つけることはできませんでした。(19-20 節)」

これは、ダビデが受けたそしりではありますが、彼はキリストご自身の受けられたそしりも預言していました。イエス様がこれほど心を打ち砕き、ひどく病んでおられたのですから、ましてや私たちがそしりに免疫があるわけがありません。

そしてネヘミヤは、王を通して与えてくださった神の恵みの御手を分かち合いました。これで彼らが元気づきました。元気づいただけでなく、良い仕事に着手しました。彼らに動機付けを与えることができたのです。

2:19 ところが、ホロン人サヌバラテと、アモン人で役人のトビヤ、および、アラブ人ゲシムは、これを聞いて、私たちがあざけり、私たちがさげすんで言った。「おまえたちのしているこのことは何だ。おまえたちは王に反逆しようとしているのか。」2:20 そこで、私は彼らにことばを返して言った。「天の神ご自身が、私たちを成功させてくださる。だから、そのしもべである私たちは、再建に取りかかっているのだ。しかし、あなたがたにはエルサレムの中に何の分け前も、権利も、記念もないのだ。」

ユダヤ人たちがカづけられて、喜んで人々にこの仕事について伝えたのでしよう、敵どもの耳に入りました。サヌバラテ、トビヤの他に、アラブ人ゲシムもいます。彼らは早速、彼らの働きを阻むために、そしりを使っています。「王に反逆しようとしている」と言っています。

それに対して、ネヘミヤは明確に答えています。私たちは、誹りに対して無視するのが賢いことが多いでしょう。「愚かな者には、その愚かさにしたがって答えるな。あなたも彼と同じようにならないためだ。(箴言 26:4)」けれども、ネヘミヤはこれから事業を推し進めるにあたって、彼ら敵に対するというよりも、仕事に取りかかるユダヤ人たちを強く意識して語ったのだらうと思われます。彼らを守るため、また敵に対してどのようにな姿勢で臨まなければいけないのかを語りました。

一つ目は、これは「天の神ご自身」が成功させてくださる業です。王に反逆しているとか、人間がとやかく言うような話ではなく、天の神ご自身が呼び出されて行くことであります。神が言われるのですから、私たちは事を行います。他の誰にも拠りません。そして、二つ目は「しもべである私たち」です。しもべは主人に対して、「私たちはここにおります。あなたがお命じになってください。」という、主人を待つ者たちです。自分で何かに貢献しようと働きかけるのではなく、もっぱら主から命じられることを聞くことに集中し、そして主が行いなさいと言われたら行い、何も言われなかったらそれもまた由とし、何も行わないで満足します。主に対して、自分が仕えているのだという確信が必要です。

三つ目は、「エルサレムの中に何の分け前も」ない、ということです。天の神をあがめていない者、いや、サマリヤ人は天の神をあがめていましたが、他の神々もあがめていました。したがって、主なる神のみに仕えたと決めた者たちしか、この仕事にあずかることはできないということです。

主に仕えているようで、自分に仕えているという人は、働きの助けになるようで、実は働きを阻んでいくことになります。だからネヘミヤがはっきりと一線画して、関わりを持たせないようにしました。

3A 仕事の着手 3

そして実際の仕事に着手します。

3:1 こうして、大祭司エルヤシブは、その兄弟の祭司たちと、羊の門の再建に取りかかった。彼らはそれを聖別して、とびらを取りつけた。彼らはメアのやぐらまで聖別し、ハナエルのやぐらにまで及んだ。3:2 彼の次にエリコの人々が建て、その次にイムリの子ザクルが建てた。

これから、次々と人々の名が出てきます。城壁の各部分が任されて工事に取りかかる人々の姿です。初めに大祭司とその他の祭司から始まります。羊の門は、神殿の北にある門ですが、そこから礼拝に必要な動物のいけにえが運ばれてきます。ですから、その門を彼らは聖別してから、扉をつけました。そしてメアのやぐら、ハナエルのやぐらはその西にあります。ここまで城壁を建てます。

大祭司が直接、工事に携わっていることが大事ですね。指導者である者が率先して身体を動かしているから、他の人々が付いていくことができます。語るだけではだめなのです、自分が動くのです。イエス様ご自身がそうでした。「それで、主であり師であるこのわたしが、あなたがたの足を洗ったのですから、あなたがたもまた互いに足を洗い合うべきです。わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするように、わたしはあなたがたに模範を示したのです。(ヨハネ 13:14-15)」

そして2節に「彼の次に」とあります。エルサレムの住民ではなく、エリコの町からはるばるやって来た人々です。この「次に」という言葉が、続けて出てきます。ここに、連携した作業であることがよく分かります。それぞれ任された分をしっかりと果たしていきます。

キリストの教会は、これを「体」に例えられています。コリント人への手紙 12 章に、そのことをパウロは詳しく説明しています。「あなたがたはキリストのからだであって、ひとりひとは各器官なのです。(27 節)」ですから、みなが預言するものではなく、みなが教師ではなく、みなが同じ賜物を持っている訳ではありません。けれども、主にあって与えられている分をしっかりと見ていないと、他の人が行っているところに寄り集まります。見覚えがするもの、人の目に留まりやすいところに多くの人が集まります。けれども、それは目ばかりがたくさんあって、足の親指がないような体になってしまうのです。ですから、ただ神によって呼ばれており、自分は神の命じられていることを行ない、主に仕えているのだという、しっかりとした確信が必要なのです。

3:3 魚の門はセナアの子らが建てた。彼らは梁を置き、とびら、かんぬき、横木を取りつけた。3:4 彼らの次に、コツの子ウリヤの子であるメレモテが修理し、その次に、メシェザブエルの子ベレクヤ

の子であるメシュラムが修理し、その次に、バアナの子ツアドクが修理した。3:5 その次に、テコア人たちが修理したが、そのすぐれた人たちは彼らの主人たちの工事に協力しなかった。

「魚の門」は、神殿の北西の角にあります。そして繰り返し「次に」がありますが、5節、テコアの町の人々が出てきます。テコアは、エルサレムから見えるくらい近い所にあり、南にある町です。預言者アモスの故郷です。ここで興味深いことに、「すぐれた人たち」とありますが、これは貴族のことです、彼らは工事に協力しませんでした。必ずしもすべての人が協力しなかった訳ではありません。どの組織でも、そして教会であっても、誰かは協力しないという現実があります。

3:6 エシャナの門はパセアハの子エホヤダと、ベソデヤの子メシュラムが修理した。彼らは梁を置き、とびら、かんぬき、横木を取りつけた。3:7 彼らの次に、ギブオン人メラテヤと、メロノテ人ヤドン、それに川向こうの総督の管轄に属するギブオンとミツパの人々が修理した。3:8 その次に、金細工人のハルハヤの子ウジエルが修理し、その次に、香料作りのひとりハナヌヤが修理した。こうして、彼らはエルサレムを、広い城壁のところまで修復した。

「エシャナ」あるいは、古い門は西の城壁になり、それから南に向かって分担している者たちの名が連なっています。エルサレムの周りの町々であるギブオンまたミツパから来ています。それから、銀細工人であったり、香料作りであったり、いろいろな職業の人々が工事に携わっています。神の働きには、いろいろな職種の人があります。教会は牧師と雇われたスタッフの人たちがやる場所だ、と思ったら大きな間違いです。一人一人が関わり、すべての人が関わる場所です。そして、「広い城壁」ですが、これが今、エルサレムの旧市街に遺跡として発掘されています。ヒゼキヤあるいはマナセが造ったものと言われています。

3:9 彼らの次に、エルサレム地区の半区の長、フルの子レファヤが修理した。3:10 その次に、ハルマフの子エダヤが自分の家に面する所を修理し、その次に、ハシャブネヤの子ハトシュが修理した。3:11 ハリムの子マルキヤと、パハテ・モアブの子ハシュブは、その続きの部分と炉のやぐらを修理した。3:12 その次に、エルサレムの残りの半区の長、ロヘシュの子シャルムが、自分の娘たちといっしょに修理した。

西の壁を、広い城壁よりもさらに南の部分に修理しています。そして、ここに携わっている人が、このエルサレム地区の区長たちです。大祭司のような宗教指導者のみならず、行政の指導者も同じように手を動かしています。娘までがいっしょに修理をしています。

そしてここで、「家に面する所」とあります。これからも出てきますが、エルサレムに住む者たちは、自分たちの家に面している部分を任されています。家に近い部分であれば、そこを修理しなければいけないという強い動機付けになりますし、またわざわざ他の地区にまで行って工事することもありません。どの家に面していない部分をおそらくは、エルサレムではないところの、ユダやベニ

ヤミンの町々に住んでいる人々に工事を行わせたのだと考えられます。

したがって、ここから分かるのは、「自分の家を軽んじない」という原則です。神の家に関わる者は、自分の家をしっかり治めているのか、信仰生活の真価が試されます。監督の資格の中にこんな言葉があります。「…自分自身の家庭を治めることを知らない人が、どうして神の教会の世話をすることができるでしょう。…(1テモテ 3:5)」

3:13 谷の門はハヌと、ザノアハの住民が修理した。彼らはそれを建て直し、とびら、かんぬき、横木を取りつけ、糞の門までの城壁一千キュビトを修理した。3:14 糞の門はベテ・ハケレム地区の長、レカブの子マルキヤが修理した。彼はそれを建て直し、とびら、かんぬき、横木を取りつけた。

谷の門は、ネヘミヤが調査を開始したところです。そしてずっと南へと進み、南端にある糞の門までの修理をしました。今のエルサレムにも、糞の門があつて、そこから嘆きの壁に入ると一番近いです。

3:15 泉の門はミツパ地区の長、コル・ホゼの子シャルンが修理した。彼はそれを建て直し、屋根をつけ、とびら、かんぬき、横木を取りつけた。また、王の園のセラフの池の城壁を、ダビデの町から下って来る階段のところまで修理した。3:16 そのあとに、ベテ・ツル地区の半区の長、アズブクの子ネヘミヤが、ダビデの墓地に面する所と、人工貯水池と、勇士たちの家のところまで修理した。

「泉の門」は、南端から少し東にある門です。そして、「王の園」はその南端にあるところです。エレミヤ書 39 章 4 節によると、ここを通過してユダの最後の王ゼデキヤは、包囲されたバビロンから逃げていきました。そして、ここは元祖エルサレム、「ダビデの町」の様々な名残があります。ダビデの墓地があり、人工貯水池があり、そしてダビデの勇士を覚える家もあります。

3:17 そのあとに、バニの子レフムなど、レビ人たちが修理した。その次に、ケイラ地区の半区の長、ハシャブヤが、自分の区域のために修理した。3:18 そのあとに、ケイラの残りの半地区の長、ヘナダデの子バワイなど、彼らの同僚たちが修理した。3:19 その次に、ミツパの長、ヨシュアの子エゼルが、城壁の曲がりかどにある武器倉への上り坂に面した続きの部分を修理した。3:20 そのあとに、ザカイの子バルクが、城壁の曲がりかどから大祭司エルヤシブの家の門のところまでの続きの部分を、熱心に修理した。3:21 そのあとに、コツの子ウリヤの子メレモテが、エルヤシブの家の門からエルヤシブの家の端までの続きの部分を修理した。3:22 そのあとに、低地の人々である祭司たちが修理した。

東の壁を北に向かって工事分担していますが、この地域は住居区になっていたようです。住んで

いる人々が工事をしていきました。そして、武器倉庫があり、さらに大祭司エルヤシブの家があります。神殿に少し近づいてきたからです。そしてネヘミヤは 20 節、バルクという男が、大祭司の家の門を「熱心に」修理したと強調しています。霊的に特筆すべきことだからでしょう。

3:23 そのあとに、ベニヤミンとハシュブが、彼らの家に面する所を修理した。そのあとに、アナネヤの子マアセヤの子アザルヤが、自分の家の近くを修理した。3:24 そのあとに、ヘナダデの子ビヌイが、アザルヤの家から城壁の曲がりかどの、隅までの続きの部分修理した。3:25 ウザイの子パラルは、城壁の曲がりかどに面した所と、監視の庭のそばにあつて、王宮から高く突き出ているやぐらを修理した。そのあとに、パルオシュの子ペダヤと、3:26 オフェルの住民で宮に仕えるしもべたちとは、東のほうの水の門、および突き出ているやぐらに面する所までを修理した。3:27 そのあとに、テコア人が、突き出ている大きなやぐらに面している所から、オフェルの城壁までの続きの部分修理した。

家がどんどん続いています。その近くの部分の城壁を自分たちで修理しています。さらに、王宮があつたところのやぐらを修理して、26 節、「オフェルの住民」とあります。オフェルは神殿の丘とダビデの町の間の部分です。そこには、宮に仕えるしもべたちが住んでいて、彼らが東にある水の門のところを修理しました。そして、先ほどはテコア人の貴族が協力していませんでしたが、ここでは協力しているその他のテコア人がいます。

3:28 馬の門から上のほうは、祭司たちがそれぞれ、自分の家に面する所を修理した。3:29 そのあとに、イメルの子ツアドクが、自分の家に面する所を修理した。そのあとに、シェカヌヤの子、東の門を守る者シエマヤが修理した。3:30 そのあとに、シレムヤの子ハナヌヤと、ツアラフの六男ハヌンが、その続きの部分修理した。そのあとに、ベレクヤの子メシュラムが、自分の部屋に面する部分を修理した。

馬の門は、神殿の丘の南東にある門でここから北に向かう所は、神殿の東にあります。そこは祭司たちの家が連なっていました。彼らの家に面する城壁を補強していきます。

3:31 そのあとに、金細工人のひとりマルキヤは、召集の門の向かい側にある宮に仕えるしもべたちや商人たちの家を、かどの二階の部屋のところまで修理した。3:32 かどの二階の部屋と羊の門の間は、金細工人と商人たちが修理した。

召集の門は、東の壁の北にある部分です。そして、北の壁との角があり、北の壁を羊の門までを修理しました。ここには商人たちが住んでいたようです。

いかがでしょうか、これで一気に城壁が破れ口がすべて埋められる形で一気に建てられていきました。だから敵どもはびびっています。4 章 1 節を見ると、「サヌバラテは私たちが城壁を修復し

ていることを聞くと、怒り、また非常に憤慨して、ユダヤ人たちをあざけた。」と言っています。

いかがでしょうか、敵を非常に怒らせる働きを彼らは見事にすることができました。もし、これが自分の持ち場が分からずに、また自分の家のところを行わずにしていたら、怒らせることはなかったでしょう。神の民は、一つになることによって、その分をそれぞれが果たすことで敵をうろたえさせることができるのです。キリストの願いは、私たちが一つになることです。そして、私たちが神に対してのみ仕え、しもべになっていることです。教会のかしらはキリストです。私ではありません。ですから、私たちが一人一人、かしらなるキリストにつながる責任があります。そして、麗しい御霊の流れが、その一致の中で起こるのです。